

2 0 2 5 年 度

第 1 回

入 学 試 験 問 題

国 語

試験時間 50分

注 意

- 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開いて見てはいけません。
- 問題は□から□まであり、全部で16ページです。足りないページや、印刷が不鮮明な箇所があった場合は、手をあげて監督者に申し出てください。
- 問題冊子と解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください。
- 解答は、すべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 問題の内容に関する質問は受け付けません。
- 試験終了後、監督者の指示に従い問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 特に指示の無いかぎり、句読点や記号は1字で数えます。

佼成学園女子高等学校

受験
番号



次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

① 私が歌っている声が誰かに聞かれてしまったら、大変なことになる。

もしかしたら殴られるかもしれない。殴られなくても、私の宝物である

※¹ マイクロSDカードは没収されてしまうだろう。 ※² アル・シャバブ

の勢力が残っている ※³ モガデイシユでは音楽は禁止なのだ。音楽を流したラジオ局は襲撃され、人前で歌えば最悪の場合、殺される。

それでも、私は音楽なしでは生きていけない。こうして音楽を聴いているときだけが、幸せな時間なのだ。リズムとメロディ、歌だけが私に生きている意味を教えてくれる。私たちの生活から奪われてしまった何か素敵なものが、まだこの世界のどこかにあるのだと。

病気で寝ている母と、これから学校に行く妹のために朝食を用意すると、家を出て市場に向かった。

街では照りつける太陽が地面を焼き、吹きつける潮風が肌にまとわりつく。人々の話す声、走り抜ける車のエンジン音と騒々しいクラクシヨン、多くの家畜の鳴く声。そして内戦で廃墟となったビルを吹き抜ける風の寂しげな音。聞こえるのはそれだけだ。かつてこの街中で音楽が流れていたなんて、私には信じられない。今から十七年前、私が産まれた頃には、既にソマリアは内戦で荒廃していた。

私はバナナを売りながら、いつもの夢を思い返す。兵士に殴られることも、殺されることも悪夢に間違いない。だがそれと同時に人前で歌うことができるのも、ディークと会うことができるのも、夢の中だけなのだ。

ディークは三年前、私たちの前からいなくなってしまった。彼とはいつまでも一緒にいられると思っていた。だが、同時にいつか彼がいなく

なってしまうような気もしていた。

幸せな将来などないことは分かっていたが、まさかディークがアル・シャバブに拉致されるなんて思いもしなかった。

(中略)

夕方になって市場から家に帰ると、妹のカフィーヤが興奮気味に私の手を取って、その日学校で聞いた噂のことを話し始めた。

「ハディーヤ姉ちゃん！ 聞いて。今度ね、歌のコンテストがあるんだって。ナジャが言っていたの。ソマリアで一番の歌手を決めるんだって。お姉ちゃんなら一番になれるよ。だって、ハディーヤ姉ちゃんは誰よりも歌がうまいもん」

私が喜びの声を上げるよりも早く、「ダメよ！」という母の声が寝室から聞こえてきた。母はゆつくりと部屋から出て来ると、私たちを怒鳴りつけた。

「人前で歌うなんて、とんでもない！ あなた、サアド・ワルサメがどんな目にあったか忘れたの？ それに、シャイア・アウエルだって殺されたのよ。アル・シャバブに逆らって音楽を流したラジオ局だって放火されたの。誰かに歌を聞かせるなんて、殺してくれて言っているようなものじゃない！」

サアド・ワルサメは勇敢な女性だった。大統領が高級車に乗っているのに、外国の援助を求めていることを皮肉った曲を歌った。女性なのに髪を隠さずにステージに上り、男のようにズボンを穿いたりもした。アメリカで自由を学んだ彼女は議員になり、そして射殺された。

「でも、お母さん。それでも私は歌いたい。たとえ歌わなくても、いつ

殺されてもおかしくないじゃない。それなら、私はせめて歌って死にたい」

「ハディーヤ、そんなこと言わないで。アル・シャバブだって、少しづつモガディシユから撤退を始めてる。今を耐え忍べば、もっと良い生活ができるはずよ」

「今を耐え忍べばっていつまで耐えればいいの！ 私がバナナを売って、いつまで二人を養えるの？ 今のお金が無くなったら、私にどうやって稼げて言うのよ？ ねえ、お母さん！」

「何といつても、ダメなものはダメ。お父さんが生きていたら、絶対に許さないでしょ」

「でも……」カフィーヤが口を開くと、母は幼い妹に手を上げた。

「でもない！ 私はあなたたちに生きていて欲しいの。それが分からないの！」母は泣きながらカフィーヤの頬を叩いた。

「でも……」カフィーヤも大粒の涙を流しながら言葉を続けた。「でも、優勝したら賞金がもらえるんだって……」

カフィーヤの顔は涙と鼻水で汚れていた。^②母は妹を叩くのを止めた。

(中略)

これは夢ではないのだ、本当に私たちが歌うコンテスト番組が作られるのだ。私はようやくここにきて、^③事の重大さに気が付いた。重要なのは誰がこの番組を企画したかではない。私の歌が全国で放送されるのだ。それはアル・シャバブの怒りを煽^{あお}って更なる暴力を生み出す可能性がある。だがもしかしたら、これがきっかけでモガディシユの街に音楽

が戻ってくるかもしれない。

主催者が私たち三人に番組の進行を伝えようとしていた。私は極度に緊張しており、彼女の言葉はひとつも耳に入らなかった。

もしもちゃんと歌えなかったら、どうしよう。私は今更そんなことを考えていた。今まで人前で歌ったことなど、殆^{ほとん}どない。予選会場ですら歌うことなく終わってしまったのだ、日常で声を出して歌う練習などできるはずがなかった。

私は呼吸を整えようとしたが、一般の審査員が続々とスタジオに入ってきて、周囲はざわめき始めた。気持ちを切り替えることもできずに、本番がスタートすることになった。

「テレビの前の皆さん、そしてラジオの前の皆さん、『スターズ・イン・ソマリア』ようこそ！ 今日モガディシユのスタジオからお送りいたします」燃えるような赤い生地のカジャブを着た女性が、カメラに向かって笑顔で話しかけた。

「今日集まってもらったのはモガディシユでもトップクラスの歌手三名です。彼らにはそれぞれ一曲ずつ歌ってもらい、審査員の皆さんの投票で勝者が決定します。まずは市場で働きながら家族を養う、元気な女の子、ハディーヤ！」

MCの紹介があり、小さくお辞儀をすると、すぐ目の前に座っている一般審査員たちが拍手をした。私は一瞬だけカメラの方を向いて、すぐに目を逸らした。眩い照明を浴びながら、私の曲が始まるのを待った。だが機材にトラブルがあるようで音楽は鳴らず、困り果てたMCの女性が番組の特別審査員たちを紹介し始めた。

私は^b不意にできた時間に心を落ち着けようと、昔の楽しかったことを思い出そうとした。

50

55

60

65

70

75

80

85

90

95

デイクがアル・シャバブに連れ去られる二ヵ月ほど前のある朝のこ

と。砂浜に私たち二人しかおらず、誰にも聞かれる心配がなかったの

で、^{※4}カドラ・ダーヘル⁴の歌を彼のために歌ったのだ。デイクしか

いなかったとはいえ、家族以外の人の前で歌ったのはあの時だけだ。

「ハディーヤ、いつか君は良い歌手になれるね」デイクは私の目を見

ながら、そう言ってくれた。私は彼の優しさに甘えたかった。彼の手に

触れたかった。だが、それもまた歌うこと同様に許されることではな

かった。

私たちは幼いながらも将来を誓い合っていた。デイクの氏族は別の

氏族とは結婚しないことが一般的なので、彼の両親が私たちの結婚に反

対することは目に見えていた。私たちはワンラ・ウエインの街に駆け落

ちしようと話していた。子供が出来てから戻れば、親も納得するだろう

と思っていたのだ。

もしかしたら、私の歌をデイクが聞いてくれるかもしれない。私は

ふとそう思った。全国のテレビやラジオで放送するのだ、デイクが聞

く可能性だって少なくないだろう。

そう思った瞬間に、突然私の曲が始まった。MCは咄嗟^{ととさ}の判断で審査

員との会話を止めて、もう一度私のことを紹介し、番組の^c体裁を取り

繕った。

私はデイクに聞かせるつもりで、あの時の砂浜を思い出して声を出

した。歌は私の喉^{のど}から自然に流れ出した。川が海に流れるように清らか

に、砂漠を歩くラクダのように確かに、私の歌はフロア中に響き渡った。

いつでも私を支えてくれたカドラ・ダーヘルの歌、私以外の誰にも聞か

れないように隠れて聴いた歌。その歌を、その感動を、他の人に分け与

えることができるのだ。これ以上に幸せなことがあるだろうか。

歌い終わると自然に涙が溢^{あふ}れた。五十人以上はいるだろう審査員も盛

大な拍手で、私の歌に反応してくれた。その瞬間に私は確信した。私た

ち、モガディシユの市民は暴力を恐れてはいたが、それでもみんな歌を

待ち続けていたのだ。みんな歌を、音楽を愛していて、誰にもその愛を

奪うことはできない。

番組はそのまま続いた。私の心には不安も緊張もなかった。どんな喜

びがこの先に待ち受けているのか、考えただけでわくわくしていた。

初老の男性は音楽家の血筋で、父親譲りの素晴らしい歌声を聞かせて

くれた。そして最後に歌った若い男性は、ギターの弾き語りで自作の曲

を歌い上げた。^④彼の曲はこの街で、この時代に作られた歌だとは思え

ないほどに輝いていた。私は隠れて音楽を聴くだけだった。しかし、彼

は自分の曲を書いていたのだ。それがどんなに危険で勇敢なことか、私

には痛いほど分かった。

今、私たちの街は変わるのだ。アル・シャバブはモガディシユから少

しずつ撤退していたが、それでも私たちの心は恐怖で支配されていた。

私たちはいつまでも恐れているままではいられない。私たちの歌が、モ

ガディシユの街を変えるのだ。

番組は自作の曲を披露した若い男性が優勝して終わった。私の心には

ひとかけらの不満もなかった。彼の歌は素晴らしく、私の次の目標にも

なったからだ。

私も、自分の歌を作りたい。この街で、変わりゆく人々を勇気づける

ような、そんな歌を作りたい。心の底からそう思った。

その後、『スターズ・イン・ソマリア』は予定通り全国のテレビやラ

ジオで放送された。モガディシユのみんなが番組を視聴して、放送日は

大変な騒動となった。次の放送がいつになるのか、どうしたら参加で

さるのか、と運営側には問い合わせが殺到したようだ。『スターズ・イン・ソマリア』は歌のコンテストだけではなく、起業を志す者が投資家に向けて自分が考えたアイデアを提案するシリーズもスタートした。

優勝はできなかったものの、周りの皆は私の歌を褒めてくれた。それだけでなく、知らない人からも声を掛けられることがあった。怖くなかったとは言えない。だが、街は少しずつ変わっていった。

モガディシウの街ではいつの間にか音楽が流れるようになった。単にアル・シャバブの支配力が弱まっただけかもしれない。それにタイミングを合わせるように『スターズ・イン・ソマリア』が始まった。もちろん、完全な平和が訪れたとは言い難い状況ではあるが、それでもモガディシウの街には音楽が戻っていた。

（須藤古都離「どうせ殺すなら、歌が終わってからにして」）

*作問の都合上、一部省略・改変した箇所があります。

※1 マイクロSDカード…動画や音楽などのデータを保存できる小型のメモリーカード。

※2 アル・シャバブ……ソマリアを中心に活動するイスラム過激組織。

※3 モガディシウ……ソマリアの首都。

※4 カドラ・ダーヘル……ソマリアで一番の歌手。ハディーヤのお気に入りである。

問一 二重傍線部 a「皮肉った」、b「不意に」、c「体裁を取り繕った」

について、本文中の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 皮肉った

ア 大げさに悲しんだ

イ 手放しで賛美した

ウ 遠回しに非難した

エ 正面から批判した

b 不意に

ア 突然に

イ 無駄に

ウ 思い通りに

エ 無理やりに

c 体裁を取り繕った

ア 内容を修正した

イ 本来の形式を取り戻した

ウ 内容をごまかした

エ 表面上の形式を整えた

問二 傍線部①「私が歌っている声が誰かに聞かれてしまったら、大変

なことになる」とありますが、なぜ大変なことになるのですか。本文中の語句を用いて二十五字以内で説明しなさい。

問三 傍線部②「母は妹を叩くのを止めた」とありますが、それはなぜ

ですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 娘たちの計画に危機感を覚え強く反対していた母だったが、ハディーヤの歌に対する情熱に心を動かされたから。

イ ハディーヤの危険な挑戦に強く反対していた母だったが、カフィーヤに痛いところを突かれ抗うことができなくなったから。

ウ 娘たちの考えに激しく反対していた母だったが、カフィーヤに生活の一助となる可能性をほめかされ、一家の明るい未来が予感されたから。

エ ハディーヤの浅はかな考えに反対の意を示していた母だったが、カフィーヤの反抗的な態度に圧倒されたから。

問四 傍線部③「事の重大さに気が付いた」とありますが、この時の「私」

の心情として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 期待 イ 絶望 ウ 緊張 エ 不安

問五 傍線部④「彼の曲は……輝いていた」とありますが、その曲を聴

くことによつて「私」はどのような影響を受けましたか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」はこれまで楽器を弾くことができなかったが、彼の素晴らしい演奏に心を打たれ、自分もギターの弾き語りを目標にするようになった。

イ 「私」はこれまでカドラ・ダーヘルトリコの歌が一番のお気に入りだったが、息をのむほどに素晴らしい彼の歌に感動し、彼の歌の虜とりこになった。

ウ 「私」は誰にも気づかれないように歌ってきたが、彼の勇敢な演奏に胸をうたれ、自分も危険を顧みず歌うことで優勝を目指そうと考えた。

エ 「私」は隠れて音楽を聴いてきたが、彼の勇氣ある行動から歌の力を再認識し、人々を勇氣づけられる歌を作ることを目指すようになった。

問六 次の文章は、ディークがアル・シャバブから戻ってきて、歌って

いるハディーヤの前に姿を現す作品末尾の場面です。この場面について、先生と生徒たちによつて後のような対話が行われました。傍線部ア～エの発言のうち、解釈として適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

私は勘違いしていた。彼は決して太ってなどいない。

服の下に何かを隠しているだけなのだ。何か、大きなものを。

「ハディーヤ、やっぱり君は素晴らしい歌手になったね」

デークはゆつくりと近づきながら言った。

私は彼との再会をずっと待ち望んでいた。だが、こんな形ではない。
「ずっと君のことばかり想っていた。君がどうしているかって、いつでも考えてた」

私は何かを言わなきゃいけなかった。でも言葉にならなかった。

「でもこれからはずっと一緒にいられる。ずっと一緒だ」

言葉は優しいが、覇気のない諦めきった口調だった。

「違う……、違う。もうモガディシュはそんな街じゃない。私たちはちゃんと幸せに生きていけるの。いろんな会社が警備の仕事を募集してるんだし、あなただって仕事を見つけれられる」

「もういいんだよ。そんなことは。なんの心配もいらないんだよ」

優しく明るかったデークの面影はそこにはなかった。真一文字に閉じられた彼の口元に深い絶望が見てとれた。

「もうアル・シャバブから抜けられるでしょ？ どこかに逃げようよ。昔、約束したみたいにな。誰も私たちを知らない場所に行こうよ。お願いだから、こんなことは止めて……」

私の頬は涙で濡れていた。

「もういいんだよ。怖がらなくて大丈夫」

彼は私の目の前まで来ると、私に強引なキスをした。

私は彼を止められなかった。

私たちは誰も彼を止められなかった。

私はもっと歌いたかった。

【対話文】

先生 最後の場面について、みなさんはどのように受け取りましたか。

生徒A 「待ち望んでいた」再会のはずですが、私はあまり明るい結末には感じられませんでした。

生徒B そういえば、彼は三年前から、アル・シャバブに拉致されていたよな。同じ国にいても、実際に戦争に参加させられていたかどうかでは、過ごす環境には違いがあるように思います。

生徒C ハディーヤは歌のコンテストに出たり、前を向いて生きている印象があつたけど、彼はそうではなさそうですね。ハディーヤが「勘違いしていた」とあるけれど、^アデークはこの厳しい世界で生きることを諦めようとしているように感じました。

生徒D 「もういいんだよ。」と繰り返し言うデークは、愛する故郷を捨ててでも、^イハディーヤと新しい場所で安全な生活を送ろうとしているのでしょうか。

生徒A 改めて最後の場面を読み返してみると、やはりあえてこの結末にした意味がありそうですね。美しい物語で終わらせるのではなく、悲しい結末を描くことによって、^ウ筆者は現実の厳しさを読者に伝えたかったのではないのでしょうか。

生徒B 一方でそうした戦争など、^エ理不尽な暴力に対して強く抗議する姿勢も示しているのだと私は思います。

先生 作品の結末の解釈を読者にゆだねる小説は多くあります。みなさんのように細かな表現に着目することで、さまざまなことに気づくことができますね。

二

次の文章は著者である磯野真穂が哲学者の宮野真生子、人類学者の木村大治の著書を引用しながら人の出会いについて述べたものである。これを読み、後の問いに答えなさい。

宮野は『出逢いのあわい』の中で「出会い」を次のように解説する。

もちろん、あらゆる現実、存在者との関わりが出会いだが、^①多くの人は

その出会いに気づかない。とくに「出会い」として体験されるのは、「予想もしなかった邂逅」^{かいこう}「ありえないこと」というふうに、あらかじめ企図された可能性による意味づけが無効化され、自己理解の地平が届かないときである。

5

ここで特に注目したいのは「自己理解の地平が届かない」という箇所である。

10

私たちは日々の暮らしの中で起こるあれこれを、了解可能性の範疇^{はんちゅう}に入れ込むことで日常を安定させている。だから目の前にあるメモ帳の1ページが他とは異なる唯一無二の1ページであると言われても、それを実感することは難しいし、昨日会ったその人は、今日は異なる別人であると言われても、それを出会いとしては感じない。メモ帳とはこのようにできていて、(1) このメモ帳も同じように使えるだろう、この人とはこのように言葉を交わせばいいだろうという、過去の類似経験やモノ・コト・ヒトに関する知識が素地となった了解可能性の中に、厳密に見れば存在するはずの他者の唯一性は回収されるからだ。

15

(2) 他者は私たちの予測をしばしば超えてくる。まっさらな1枚の紙が現れるだろうと期待してメモ帳をめくったら、そのページにだけ大きな穴が開いていた。怒ったことなど一度もない友人が、突然烈火

20

のごとく怒りだした、というように。その時、私たちは驚きとともにその現象に出会う。(3) それらの現象は、世界はこうであろうという私たちの予測を裏切つて眼前に現れるからである。

ここで宮野が^{※1}九鬼を引きながら、出会いに伴う驚きを「知的情緒」と強調していることに着目したい。出会いにより生ずる驚きは、世界はこうなっている、これからもこうであろうという世界に対する知的理解の亀裂である。メモ帳はこのような道具である、友人某^{なにがし}はこのように人であるという理解がまず存在しなければ、メモ帳に現れた穴を見ても、友人の怒りを見ても驚きは生じえない。その意味で出会いとは、世界をA的に理解しようとしてきた知性のみが経験し得る現象なのである。

30

対して木村は島崎藤村の「昨日またかくてありけり 今日もまたかくてありなむ」の詩を引きながら出会いを次のように解説する。

35

出会いの不安定さとは、「かくてありけり」が欠如した状態において「かくてありなむ」を定めなければならないという点に存していると言える。(中略)そこは「どっちに行ったらいいかわからない」という不安とともに、「どっちにでも行ける」可能性を孕^{はら}んだ点なのである。

出会いの瞬間には、その後どう動いたらいいか途方に暮れるような驚きが現れる。それはこれまでこのようであったから(B)、次はこのようになるだろう(C)という予測が働かないからだ。ゆえに出会いは不安や恐れをもたらすが、同時に「かくてありけり」が欠如しているゆえに「どっちにでも行ける」という可能性が秘められた「特異点」となる。

45

40

しかし「かくてありけり」の欠如には度合いがある。(4) 初対面同士は、友人同士に比べると「かくてありけり」が欠如した状態であるが、初対面同士はこう振る舞うといった規範や、私たちはともに人間であるといった行動の基盤となるリソースがあり、それを手がかりに私たちは相互行為を行う。したがって「かくてありけり」は友人同士に比べると欠如しているが、「かくてありけり」がゼロというわけでもない。

このように考えると宇宙人との出会いを考える意義が見えてくる。まず宇宙人に対して初対面同士の振る舞いの作法が届くかはわからないし、同じ人間だからわかり合えるだろうという期待を持つこともそもそもできない。この意味で、木村が考える宇宙人との出会いは「かくてありけり」が圧倒的に欠如した^②究極の出会いとも呼べる現象なのである。

それでは私たちは出会いという知的情緒をもたらしただ他者とのように共に在ること、在り続けることができるのだらう。木村は共在を可能にする条件を提示するため、次のふたつの道具を用意する。ひとつ目が「共在の枠」、ふたつ目が「投射」である。

共在の第1条件は、互いの間に規則性が生成されることである。これを木村は、「参与者たちがともに支え合っている相互行為の規則性」と解説し、それに「共在の枠」という名を与える。

規則の生成が共在の大前提であることを示すため、木村は『こぎつねコンとこだぬきポン』という絵本、及び挨拶の奇妙さを取り上げる。まず、共に寂しい思いをしているコンとポンが谷を挟んでくわし、相手が頭を草むらから出したら自分も出すという行為を繰り返すシーンが取り上げられる。このやりとりが、ふたりが親しくなるきっかけを作ったゆくのだが、この相互行為は、相手が手を挙げたら自分も手を挙げ返すというやりとり次第に移り変わる。

ここで行われているのが初対面の二者による規則の生成である。第1段階で相手が頭を上げたら、自分も上げるといふ規則が生成される。次に相手が手を挙げたら自分も挙げ返す、つまり相手の行為を模倣するといふ先ほどより一段階^{※2}メタな規則が立ち上がる。共在の枠は相互行為を行う両者が言動の相補性や相称性を作り上げることで生成され、それが反復されることで維持されていく。

互いの間に行為の相補性や相称性、つまり規則性を作り出すことが共在の枠を生成することを踏まえると、なぜ私たちが挨拶を行うのかが見えてくる。

挨拶には、実に多様な形式があり、動物にも明らかに挨拶と思われる行為が存在する。しかし挨拶にどんな意味があるといふのだらう。挨拶には、挨拶以上の意味はないし、挨拶をする私たちも初対面の人に会うたびに、その人らしさに合わせた挨拶をしようなどとは思わない。^③型通りのことをやるだけである。しかしそれにもかかわらず、このやりとりの中で何かが起こっている。これについて木村は次のような解説を加えている。

なぜ挨拶は形式的であり、空疎であるという印象を与えるのだろうか。それは、出会いの瞬間に、自分と相手双方にかかわる行為の規則性を素早く確実に作り上げなければならない、という要請から生じると考えられる。その場合、もしもなされる行動が「真剣な攻撃」とか「夢中な摂食」といった「本気の」行動であつたならば、それを相手の行動と素早く組み合わせることは難しいだらう。したがって、そこでなされなければならないのは「本気でない」つまり空疎な行動であり、それを相手に顕示するために大げさに示すことが必要になってくる。

相互行為は挨拶で満ちている。「おはよう」「こんばんは」といった日常のやりとり。「お世話になっております」で始まり「よろしくお願いします」で終わるメール。これらはすこぶる空疎で形式的であるにもかかわらず、大人は子どもに挨拶の大切さを執拗に教えようとし、挨拶ができない人は疎まれる。

木村と宮野が共に指摘するように、出会いには不安を伴う。その瞬間において、どのような振る舞いをすればよいかに迷いが生ずる。しかしとりあえず挨拶を交わしておけば、共在の枠を瞬時に立ち上げることが可能となる。宮野であれば、出会いの衝撃を吸収するための装置のひとつとして挨拶を捉えるだろう。これが一見無意味に見える挨拶の意味なのである。

共在の枠が「いま共に支え合って作り上げている相互行為の場」であることに對し、その共在の枠を基盤にしながら、未来に向かって共在の枠を立ち上げようとする身構えと身振りが投射である。先の例では、コンが頭を上げたら、ポンも上げるという行為が反復されたことで共在の枠が作られ、維持された。この場合ふたりのやりとりにおいて投射に当たるのは「頭を上げる」という行為である。

その意味で投射とは、これまでやってきたこと（かくてありけり）を、これからも続ける（かくてありなむ）身構えであるのだが、注意したいのは、これまでやってきたことに拘束されるばかりが投射ではないということだ。例えばコンとポンの場合、コンが途中でさっと手を挙げるという新たな投射を相互行為に差し挟んで規則の変容を試みた。つまりコンは、「頭を上げる」というそれまでの規則に縛られつつも、そこから抜け出る投射を試みたのである。

しかし新しい投射には危険も伴う。共在の枠はひとりでは生成できず、自分の投射に對し相手が何らかの形で応答しないと共在の枠は立ち上がらないからだ。

コンは、手を挙げた自分に對しポンが友好的に応答してくれることを期待しているが、これは新しい投射であるゆえ、そうなるかは不確定である。もしかするとポンはコンが生成した新しいルールに耐えられず、その場を去ってしまうかもしれない。もしそうなったらせっかく生成され続けていた共在の枠も破壊されてしまう。

投射にある程度の危険が伴うのは、私たちの相互行為においても同じである。私たちは自らが抱える深い悩みの相手への開示や、相手のことが不快でたまらないといった、互いの関係性の核心に触れるようなことをやりとりの組上そじょうに載せること、すなわち新しい投射を行うことをためらう。なぜならこれまで試みられたことのないその投射が、相手の気分を害したり、よそよそしくさせてしまったりする形で、これまで保たれていた共在の枠を壊すことを恐れるからだ。

結果私たちは新しい投射をためらい、それでも投射が必要な際は共在の枠が破壊されない方法を模索するが、ここで私たちの前に大きな壁が立ちほだかる。それは、共在の枠は規則によって生成・維持される一方で、それを絶対に破壊しない規則は発見できないという、規則そのものが持つ不可知性である。

④ 私たちの身の回りには他者関係を円滑にし、トラブルを乗り越え、人生最良の出会いを得るためのマニュアルが大量に存在する。この理由はこれまでの議論から明らかであろう。

相互行為は、いつ壊れるかわからないという脆弱性を常に孕み、それを避けるため私たちは、専門家の意見を求めたり、書籍を買ったり

して、自分たちの相互行為の外側に最善のやり方——つまり相互行為の個別性を取り払ってもなお残る規則——を探る。あるいは過去の類似のやりとりを振り返りながら、それを反復しようと試みる。しかしそれでもなお、その先の相互行為の安定性は保証されない。なぜなら共在の枠を支える規則そのものが不可知性を帯びているからである。

150

(磯野真穂『他者と生きる』)

*作問の都合上、一部省略・改変した箇所があります。

※₁ 九鬼……哲学者の九鬼周造のこと。

※₂ メタな…より高次元の。

※₃ 脆弱性…もろくて弱い性質。

問一 (1) (4) に当てはまる語として最も適当なものを

次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 例えば イ なぜなら ウ しかし エ だから

問二 傍線部①「多くの人はその出会いに気づかない」とあります

が、これはどうしてですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日常に起こるさまざまなできごとは厳密に見ればそれぞれ別のものであるが、その違いは取るに足りないものだから。

イ 日常に起こるさまざまなできごとはあくまで日常性の範囲内で起こるものであり、特異性を持つことなどありえないから。

ウ 人は日常の安定を得るために、暮らしの中のさまざまなことを自分の了解可能なものであると思い込もうとするから。

エ 人は日常の生活において、さまざまなできごとの違いを感知するほど知性を働かせて生きているわけではないから。

問三

A に当てはまる語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 感性 イ 論理 ウ 感覚 エ 道徳

問四

B

C

に当てはまる語句の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|---------|---|---------|
| ア | B | かくてありけり | C | かくてありなむ |
| イ | B | かくてありけり | C | かくてありけり |
| ウ | B | かくてありなむ | C | かくてありなむ |
| エ | B | かくてありなむ | C | かくてありけり |

問五

傍線部②「究極の出会い」とありますが、宇宙人との出会いが「究極の出会い」と言えるのはなぜですか。理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 宇宙人との出会いは、人間同士の出会いとちがって私たちの世界に対する知的な理解に亀裂を生じさせるから。
- イ 宇宙人との出会いは、人間同士の出会いとちがって他者の唯一性を無に帰してしまうから。
- ウ 宇宙人との出会いは、人間同士の出会いとちがって不安とともにとても親しくなれるという可能性も含んでいるから。
- エ 宇宙人との出会いは、人間同士の出会いとちがって振る舞いの規範や行動の基盤が決定的に欠けているから。

問六

傍線部③「型通りのことをやるだけである」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 子どものころから大人によって挨拶の大切さを執拗に教え込まれるから。
- イ 空疎で形式的な行為であつても挨拶ができない人は社会で疎まれるから。
- ウ 相手に合わせた挨拶をしようにもその基盤となるものが確立されていないから。
- エ 瞬間的に自分と相手の間に行為の規則性を作り上げなければならぬから。

問七 次の会話文は波線部「『こぎつねコンとこだぬきポン』という絵

本」について、生徒AとCが本文に沿って解釈を試みているものです。これを読んで後の(1)、(2)に答えなさい。

生徒A コンとポンが谷を挟んで出会い、相手が頭を草むらから出したら自分も出すという行為を繰り返すことで [X] が作られ、維持されたと述べているね。

生徒B 頭を出すという行為もまた [X] を作るための行為、すなわち [Y] であったわけだ。やがてそれは成功し、枠は維持された。これは人間で言えば挨拶を交わすことが定着した段階なんだろうと思う。

生徒C そうした中でコンは途中でさっと手を挙げるという新たな [Y] を試みたんだ。

生徒B 頭を出し合う、という規則の変容を試みたんだね。

生徒C そう。コンはもしかしたらポンが新しいルールに耐えられず、その場を去ってしまうかもしれないという [Z] を冒してまでさらなる関係をもとうとした。勇気ある行動だと思うな。

(1) [X]、[Y] に当てはまる語句をそれぞれ本文中から

[X] は四字、[Y] は二字で抜き出して答えなさい。

(2) [Z] に当てはまる語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア チャレンジ イ リスク
ウ タブー エ ジレンマ

問八 傍線部④「私たちの身の回りには他者関係を円滑にし、トラブル

を乗り越え、人生最良の出会いを得るためのマニュアルが大量に存在する」とありますが、その理由を本文中の語句を用いて説明しなさい。

【三】 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

昔、^{※1}天竺の人、宝を^A買は¹んがために、^{※2}錢五十貫を子に持たせ

てやる。大きな川の間を行く、舟に乗りたる人あり。舟の方を見や

れば、舟より亀、くびをさし出したり。錢持ちたる人、立ちどまりて、

その亀をば「^①なにの料ぞ」と問へば、「殺して物にせんずる」といふ。「そ

の亀、買はん」といへば、この舟の人はいはく、「^②いみじき大切な事あ

りて、^Bまうけたる亀なれば、^③いみじき値なりとも、^④売るまじき」とい

しをいへば、なほあながちに、手をすりて、この五十貫の錢にて亀を買

ひ取りて、放ちつ。

心に思ふやう、親の、宝買ひに隣の国へやりつる錢を、亀にかへてや

みぬれば、親、いかに腹立ちたまはんずらむ。さりとても、^⑤親の

もとへ行かであるべきにあらねば、親のもとへ帰り行くに、道に人あひ

ていふやう、「ここに亀売りつる人は、この下の渡しにて、舟うち返し

て死ぬ」となむ語るを聞きて、親の家に帰り行きて、錢は亀にかへつる

よし語らんと思ふほどに、親のいふやう、「^⑥なにとて、この錢をば返

しおこせたるぞ」と問へば、子のいふ、「さる事なし。その錢にては、

しかしか亀にかへて、ゆるしつれば、そのよしを申さんとして参りつるな

り」といへば、親のいふやう、「黒き衣着たる人、おなじやうなるが五人、

おのおの十貫づつ持て来たりつる。これ、そなり」とて見せければ、

この錢、いまだ濡れながらあり。

（『宇治拾遺物語』）

※1 天竺……現在のインドのこと。

※2 錢五十貫……「貫」はお金の単位。五十貫は当時の庶民にとって大金だった。

問一 点線部 A「買はん」、B「まうけたる」の読み方をすべて現代仮名づかい（ひらがな）で書きなさい。

問二 傍線部①「いへば」の主語として最も適当なものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

ア 親
イ 子
ウ 舟に乗りたる人
エ 黒き衣着たる人

問三 傍線部②「いみじき値なりとも、売るまじき」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 非常に高い値段であれば、売りましょう
イ 言い値で買うのであれば、売ることもできます
ウ 高額であったとしても、売ることはできません
エ 値段がつけられるものではないので、売りません

問四 傍線部③「親のもとへ行かであるべきにあらねば」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 親のもとへ帰つて説明することもできないため
イ 親のもとへ帰らないで行方ゆくえをくらまそうと思つて
ウ 親のもとへ帰つて叱られるのを覚悟して
エ 親のもとへ帰らないわけにもいかないので

問五 傍線部④「なにとて、この錢をば返しおこせたるぞ」とありますが、この言葉を聞いたときの「子」の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 安心
イ 心配
ウ 得意
エ 困惑

問六 授業でこの作品を読んだ後、先生と生徒たちの間で次のような対

話が行われました。(A)(B)に入れるのに最も適当な言葉それぞれ本文より一字で抜き出さない。

先生 今回の作品は『宇治拾遺物語』という説話集に収められた文章です。説話集というのは様々な地域に伝わる話を編集して集めたものです。この話は不思議な話でしたね。

生徒A 物語の最後に「この銭、いまだ濡れながらあり」と書かれています。たのですが、「銭」が「濡れ」ていた理由がよくわかりませんでした。

生徒B この「銭」って、(A)の中にあつたものというように考えられますよね。

先生 この物語は「報恩譚」ほうおんたんだと言われています。人から恵みや恩を受けたものが、その恩返しをする話です。そう考えると「銭」を親のところに持ってきた「黒き衣着たる人」は(B)の化身と考えられますね。

生徒A 道の途中で出会った人が「あなたに亀を売った人は、舟がひっくり返って死んでしまったよ」と教えてくれたのも疑問でした。どうして、舟が転覆するところまでの一部始終を見ていた人がいたんでしょう？

先生 そうですね。最初からの経緯をすべて知っているのは「舟に乗りたる人」なのですが、死んでしまったため教えに来ることはできません。他に唯一すべてを知っている可能性のある存在がいたのですが…。

生徒B もしかして、(B)ですか？

先生 そう考えることができますね。古文は書かれていないところまで様々な解釈を加える楽しみがありますね。

四

各傍線部の漢字は読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 資源が乏しい国。
- ② 台風の被害に遭う。
- ③ 唐突な話題で驚いた。
- ④ 体育祭前に曇天が続いた。
- ⑤ トラブルの解決に腐心する。
- ⑥ オダやかな表情で答えた。
- ⑦ 古代にホロびた文明を調べる。
- ⑧ 西洋画のテンラン会に参加する。
- ⑨ 仏教のカイリツを守る。
- ⑩ 勝利のためにギセイになる。

四

各傍線部の漢字は読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 資源が乏しい国。
- ② 台風の被害に遭う。
- ③ 唐突な話題で驚いた。
- ④ 体育祭前に曇天が続いた。
- ⑤ トラブルの解決に腐心する。
- ⑥ オダやかな表情で答えた。
- ⑦ 古代にホロびた文明を調べる。
- ⑧ 西洋画のテンラン会に参加する。
- ⑨ 仏教のカイリツを守る。
- ⑩ 勝利のためにギセイになる。

問六 授業でこの作品を読んだ後、先生と生徒たちの間で次のような対

話が行われました。(A)(B)に入れるのに最も適当な言葉それぞれ本文より一字で抜き出さない。

先生 今回の作品は『宇治拾遺物語』という説話集に収められた文章です。説話集というのは様々な地域に伝わる話を編集して集めたものです。この話は不思議な話でしたね。

生徒A 物語の最後に「この銭、いまだ濡れながらあり」と書かれています。たのですが、「銭」が「濡れ」ていた理由がよくわかりませんでした。

生徒B この「銭」って、(A)の中にあつたものというように考えられますよね。

先生 この物語は「報恩譚」ほうおんたんだと言われています。人から恵みや恩を受けたものが、その恩返しをする話です。そう考えると「銭」を親のところに持ってきた「黒き衣着たる人」は(B)の化身と考えられますね。

生徒A 道の途中で出会った人が「あなたに亀を売った人は、舟がひっくり返って死んでしまったよ」と教えてくれたのも疑問でした。どうして、舟が転覆するところまでの一部始終を見ていた人がいたんでしょう？

先生 そうですね。最初からの経緯をすべて知っているのは「舟に乗りたる人」なのですが、死んでしまったため教えに来ることはできません。他に唯一すべてを知っている可能性のある存在がいたのですが…。

生徒B もしかして、(B)ですか？

先生 そう考えることができますね。古文は書かれていないところまで様々な解釈を加える楽しみがありますね。

問一 点線部 A「買はん」、B「まうけたる」の読み方をすべて現代仮名づかい（ひらがな）で書きなさい。

問二 傍線部①「いへば」の主語として最も適当なものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

ア 親
イ 子
ウ 舟に乗りたる人
エ 黒き衣着たる人

問三 傍線部②「いみじき値なりとも、売るまじき」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 非常に高い値段であれば、売りましょう
イ 言い値で買うのであれば、売ることもできます
ウ 高額であったとしても、売ることはできません
エ 値段がつけられるものではないので、売りません

問四 傍線部③「親のもとへ行かであるべきにあらねば」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 親のもとへ帰つて説明することもできないため
イ 親のもとへ帰らないで行方ゆくえをくらまそうと思つて
ウ 親のもとへ帰つて叱られるのを覚悟して
エ 親のもとへ帰らないわけにもいかないので

問五 傍線部④「なにとて、この錢をば返しおこせたるぞ」とありますが、この言葉を聞いたときの「子」の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 安心
イ 心配
ウ 得意
エ 困惑

【三】 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

昔、^{※1}天竺の人、宝を^A買¹は²んがために、^{※2}錢五十貫を子に持たせてやる。

大きな川（なんのためか）の端を行くに、舟に乗りたる人あり。舟の方を見や

れば、舟より亀、くびをさし出したり。錢持ちたる人、立ちどまりて、

その亀をば「^①なにの料ぞ」と問へば、「殺して物にせんずる」といふ。「そ

の亀、買はん」といへば、この舟の人はいはく、「^②いみじき大切なことがあつて、^Bまうけたる亀なれば、^③いみじき値なりとも、^④売るまじき」といふ。

事情を言ふと、さらに懸命に、手を合わせて、しをいへば、なほあながちに、手をすりて、この五十貫の錢にて亀を買

ひ取りて、放ちつ。
逃がしてやった。

心に思ふやう、親の、宝買ひに隣の国へやりつる錢を、亀と交換して使亀にかへてや

みぬれば、親、いかに腹立ちたまはんずらむ。さりとても、^③親の

もとへ行かであるべきにあらねば、親のもとへ帰り行くに、道に人あひ

ていふやう、「ここに亀売りつる人は、この下の船着き場で、舟がひっくり返って死んでしまったよ

て死ぬ」となむ語るを聞きて、親の家に帰り行きて、錢は亀にかへつる

よし語らんと思ふほどに、親のいふやう、^④「^①なにとて、この錢をば返

よこしたのか」
「そんなことはしていません。」

しおこせたるぞ」と問へば、子のいふ、「さる事なし。その錢にては、

しかしか亀にかへて、ゆるしつれば、そのよしを申さんとして参りつるな
その経緯を申し上げようと思つて参つたので

り」といへば、親のいふやう、「黒き衣着たる人、おなじやうなるが五人、
これがその錢だ

おのおの十貫づつ持て来たりつる。これ、そなり」とて見せければ、

この錢、いまだ濡れながらあり。

（『宇治拾遺物語』）

※1 天竺……現在のインドのこと。

※2 錢五十貫……「貫」はお金の単位。五十貫は当時の庶民にとって大金だった。

問七 次の会話文は波線部「『こぎつねコンとこだぬきポン』という絵

本」について、生徒AとCが本文に沿って解釈を試みているものです。これを読んで後の(1)、(2)に答えなさい。

生徒A コンとポンが谷を挟んで出会い、相手が頭を草むらから出したら自分も出すという行為を繰り返すことで [X] が作られ、維持されたと述べているね。

生徒B 頭を出すという行為もまた [X] を作るための行為、すなわち [Y] であったわけだ。やがてそれは成功し、枠は維持された。これは人間で言えば挨拶を交わすことが定着した段階なんだろうと思う。

生徒C そうした中でコンは途中でさっと手を挙げるという新たな [Y] を試みたんだ。

生徒B 頭を出し合う、という規則の変容を試みたんだね。

生徒C そう。コンはもしかしたらポンが新しいルールに耐えられず、その場を去ってしまうかもしれないという [Z] を冒してまでさらなる関係をもとうとした。勇気ある行動だと思うな。

(1) [X]、[Y] に当てはまる語句をそれぞれ本文中から

[X] は四字、[Y] は二字で抜き出して答えなさい。

(2) [Z] に当てはまる語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア チャレンジ イ リスク
ウ タブー エ ジレンマ

問八 傍線部④「私たちの身の回りには他者関係を円滑にし、トラブル

を乗り越え、人生最良の出会いを得るためのマニュアルが大量に存在する」とありますが、その理由を本文中の語句を用いて説明しなさい。

問四

B

C

に当てはまる語句の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|---------|---|---------|
| ア | B | かくてありけり | C | かくてありなむ |
| イ | B | かくてありけり | C | かくてありけり |
| ウ | B | かくてありなむ | C | かくてありなむ |
| エ | B | かくてありなむ | C | かくてありけり |

問五

傍線部②「究極の出会い」とありますが、宇宙人との出会いが「究極の出会い」と言えるのはなぜですか。理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 宇宙人との出会いは、人間同士の出会いとちがって私たちの世界に対する知的な理解に亀裂を生じさせるから。
- イ 宇宙人との出会いは、人間同士の出会いとちがって他者の唯一性を無に帰してしまうから。
- ウ 宇宙人との出会いは、人間同士の出会いとちがって不安とともにとても親しくなれるという可能性も含んでいるから。
- エ 宇宙人との出会いは、人間同士の出会いとちがって振る舞いの規範や行動の基盤が決定的に欠けているから。

問六

傍線部③「型通りのことをやるだけである」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 子どものころから大人によって挨拶の大切さを執拗に教え込まれるから。
- イ 空疎で形式的な行為であつても挨拶ができない人は社会で疎まれるから。
- ウ 相手に合わせた挨拶をしようにもその基盤となるものが確立されていないから。
- エ 瞬間的に自分と相手の間に行為の規則性を作り上げなければならぬから。

して、自分たちの相互行為の外側に最善のやり方——つまり相互行為の個別性を取り払ってもなお残る規則——を探る。あるいは過去の類似のやりとりを振り返りながら、それを反復しようと試みる。しかしそれでもなお、その先の相互行為の安定性は保証されない。なぜなら共在の枠を支える規則そのものが不可知性を帯びているからである。

150

（磯野真穂『他者と生きる』）

*作問の都合上、一部省略・改変した箇所があります。

※₁ 九鬼……哲学者の九鬼周造のこと。

※₂ メタな…より高次元の。

※₃ 脆弱性…もろくて弱い性質。

問一 (1) (4) に当てはまる語として最も適当なものを

次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 例えば イ なぜなら ウ しかし エ だから

問二 傍線部①「多くの人はその出会いに気づかない」とあります

が、これはどうしてですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日常に起こるさまざまなできごとは厳密に見ればそれぞれ別のものであるが、その違いは取るに足りないものだから。

イ 日常に起こるさまざまなできごとはあくまで日常性の範囲内で起こるものであり、特異性を持つことなどありえないから。

ウ 人は日常の安定を得るために、暮らしの中のさまざまなことを自分の了解可能なものであると思い込もうとするから。

エ 人は日常の生活において、さまざまなできごとの違いを感知するほど知性を働かせて生きているわけではないから。

問三

A に当てはまる語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 感性 イ 論理 ウ 感覚 エ 道徳

相互行為は挨拶で満ちている。「おはよう」「こんばんは」といった日常のやりとり。「お世話になっております」で始まり「よろしくお願ひします」で終わるメール。これらはすこぶる空疎で形式的であるにもかかわらず、大人は子どもに挨拶の大切さを執拗に教えようとし、挨拶ができない人は疎まれる。

木村と宮野が共に指摘するように、出会いには不安を伴う。その瞬間において、どのような振る舞いをすればよいに迷いが生ずる。しかしとりあえず挨拶を交わしておけば、共在の枠を瞬時に立ち上げることが可能となる。宮野であれば、出会いの衝撃を吸収するための装置のひとつとして挨拶を捉えるだろう。これが一見無意味に見える挨拶の意味なのである。

共在の枠が「いま共に支え合って作り上げている相互行為の場」であることに對し、その共在の枠を基盤にしながら、未来に向かって共在の枠を立ち上げようとする身構えと身振りが投射である。先の例では、コンが頭を上げたら、ポンも上げるという行為が反復されたことで共在の枠が作られ、維持された。この場合ふたりのやりとりにおいて投射に当たるのは「頭を上げる」という行為である。

その意味で投射とは、これまでやってきたこと（かくてありけり）を、これからも続ける（かくてありなむ）身構えであるのだが、注意したいのは、これまでやってきたことに拘束されるばかりが投射ではないということだ。例えばコンとポンの場合、コンが途中でさっと手を挙げるという新たな投射を相互行為に差し挟んで規則の変容を試みた。つまりコンは、「頭を上げる」というそれまでの規則に縛られつつも、そこから抜け出る投射を試みたのである。

しかし新しい投射には危険も伴う。共在の枠はひとりでは生成できず、自分の投射に對し相手が何らかの形で応答しないと共在の枠は立ち上がらないからだ。

コンは、手を挙げた自分に對しポンが友好的に応答してくれることを期待しているが、これは新しい投射であるゆえ、そうなるかは不確定である。もしかするとポンはコンが生成した新しいルールに耐えられず、その場を去ってしまうかもしれない。もしそうなったらせっかく生成され続けていた共在の枠も破壊されてしまう。

投射にある程度の危険が伴うのは、私たちの相互行為においても同じである。私たちは自らが抱える深い悩みの相手への開示や、相手のことが不快でたまらないといった、互いの関係性の核心に触れるようなことをやりとりの組上^{そじょう}に載せること、すなわち新しい投射を行うことをためらう。なぜならこれまで試みられたことのないその投射が、相手の気分を害したり、よそよそしくさせてしまったりする形で、これまで保たれていた共在の枠を壊すことを恐れるからだ。

結果私たちは新しい投射をためらい、それでも投射が必要な際は共在の枠が破壊されない方法を模索するが、ここで私たちの前に大きな壁が立ちほだかる。それは、共在の枠は規則によって生成・維持される一方で、それを絶対に破壊しない規則は発見できないという、規則そのものが持つ不可知性である。

④ 私たちの身の回りには他者関係を円滑にし、トラブルを乗り越え、人生最良の出会いを得るためのマニュアルが大量に存在する。この理由はこれまでの議論から明らかであろう。

相互行為は、いつ壊れるかわからないという脆弱性を常に孕み、それを避けるため私たちは、専門家の意見を求めたり、書籍を買ったり

しかし「かくてありけり」の欠如には度合いがある。(4) 初対面同士は、友人同士に比べると「かくてありけり」が欠如した状態であるが、初対面同士はこう振る舞うといった規範や、私たちはともに人間であるといった行動の基盤となるリソースがあり、それを手がかりに私たちは相互行為を行う。したがって「かくてありけり」は友人同士に比べると欠如しているが、「かくてありけり」がゼロというわけでもない。

このように考えると宇宙人との出会いを考える意義が見えてくる。まず宇宙人に対して初対面同士の振る舞いの作法が届くかはわからないし、同じ人間だからわかり合えるだろうという期待を持つこともそもそもできない。この意味で、木村が考える宇宙人との出会いは「かくてありけり」が圧倒的に欠如した^②究極の出会いとも呼べる現象なのである。

それでは私たちは出会いという知的情緒をもたらしただ他者どのようなに共に在ること、在り続けることができるのだろうか。木村は共在を可能にする条件を提示するため、次のふたつの道具を用意する。ひとつ目が「共在の枠」、ふたつ目が「投射」である。

共在の第1条件は、互いの間に規則性が生成されることである。これを木村は、「参与者たちがともに支え合っている相互行為の規則性」と解説し、それに「共在の枠」という名を与える。

規則の生成が共在の大前提であることを示すため、木村は『こぎつねコンとこだぬきポン』という絵本、及び挨拶の奇妙さを取り上げる。まず、共に寂しい思いをしているコンとポンが谷を挟んでくわし、相手が頭を草むらから出したら自分も出すという行為を繰り返すシーンが取り上げられる。このやりとりが、ふたりが親しくなるきっかけを作ったゆくのだが、この相互行為は、相手が手を挙げたら自分も手を挙げ返すというやりとり次第に移り変わる。

ここで行われているのが初対面の二者による規則の生成である。第1段階で相手が頭を上げたら、自分も上げるといふ規則が生成される。次に相手が手を挙げたら自分も挙げ返す、つまり相手の行為を模倣するといふ先ほどより一段階^{※2}メタな規則が立ち上がる。共在の枠は相互行為を行う両者が言動の相補性や相称性を作り上げることで生成され、それが反復されることで維持されていく。

互いの間に行為の相補性や相称性、つまり規則性を作り出すことが共在の枠を生成することを踏まえると、なぜ私たちが挨拶を行うのかが見えてくる。

挨拶には、実に多様な形式があり、動物にも明らかに挨拶と思われる行為が存在する。しかし挨拶にどんな意味があるというのだろうか。挨拶には、挨拶以上の意味はないし、挨拶をする私たちも初対面の人に会うたびに、その人らしさに合わせた挨拶をしようなどとは思わない。^③型通りのことをやるだけである。しかしそれにもかかわらず、このやりとりの中で何かが起こっている。これについて木村は次のような解説を加えている。

なぜ挨拶は形式的であり、空疎であるという印象を与えるのだろうか。それは、出会いの瞬間に、自分と相手双方にかかわる行為の規則性を素早く確実に作り上げなければならない、という要請から生じると考えられる。その場合、もしもなされる行動が「真剣な攻撃」とか「夢中な摂食」といった「本気の」行動であつたならば、それを相手の行動と素早く組み合わせることは難しいだろう。したがって、そこでなされなければならないのは「本気でない」つまり空疎な行動であり、それを相手に顕示するために大げさに示すことが必要になってくる。

二

次の文章は著者である磯野真穂が哲学者の宮野真生子、人類学者の木村大治の著書を引用しながら人の出会いについて述べたものである。これを読み、後の問いに答えなさい。

宮野は『出逢いのあわい』の中で「出会い」を次のように解説する。

もちろん、あらゆる現実、存在者との関わりが出会いだが、^①多くの人はその出会いに気づかない。とくに「出会い」として体験されるのは、「予想もしなかった邂逅」^{かいこう}「ありえないこと」というふうに、あらかじめ企投された可能性による意味づけが無効化され、自己理解の地平が届かないときである。

5

ここで特に注目したいのは「自己理解の地平が届かない」という箇所である。

10

私たちは日々の暮らしの中で起こるあれこれを、了解可能性の範疇^{はんちゅう}に入れ込むことで日常を安定させている。だから目の前にあるメモ帳の1ページが他とは異なる唯一無二の1ページであると言われても、それを実感することは難しいし、昨日会ったその人は、今日は異なる別人であると言われても、それを出会いとしては感じない。メモ帳とはこのようにできていて、(1) このメモ帳も同じように使えるだろう、この人とはこのように言葉を交わせばいいだろうという、過去の類似経験やモノ・コト・ヒトに関する知識が素地となった了解可能性の中に、厳密に見れば存在するはずの他者の唯一性は回収されるからだ。

15

(2) 他者は私たちの予測をしばしば超えてくる。まっさらな1枚の紙が現れるだろうと期待してメモ帳をめくったら、そのページにだけ大きな穴が開いていた。怒ったことなど一度もない友人が、突然烈火

20

のごとく怒りだした、というように。その時、私たちは驚きとともにその現象に出会う。(3) それらの現象は、世界はこうであろうという私たちの予測を裏切つて眼前に現れるからである。

ここで宮野が^{※1}九鬼を引きながら、出会いに伴う驚きを「知的情緒」と強調していることに着目したい。出会いにより生ずる驚きは、世界はこうなっている、これからもこうであろうという世界に対する知的理解の亀裂である。メモ帳はこのような道具である、友人某^{なにがし}はこのように人であるという理解がまず存在しなければ、メモ帳に現れた穴を見ても、友人の怒りを見ても驚きは生じえない。その意味で出会いとは、世界をA的に理解しようとしてきた知性のみが経験し得る現象なのである。

30

対して木村は島崎藤村の「昨日またかくてありけり 今日もまたかくてありなむ」の詩を引きながら出会いを次のように解説する。

35

出会いの不安定さとは、「かくてありけり」が欠如した状態において「かくてありなむ」を定めなければならないという点に存していると言える。(中略)そこは「どっちに行ったらいいかわからない」という不安とともに、「どっちにでも行ける」可能性を孕^{はら}んだ点なのである。

出会いの瞬間には、その後どう動いたらいいか途方に暮れるような驚きが現れる。それはこれまでこのようであったから(B)、次はこのようになるだろう(C)という予測が働かないからだ。ゆえに出会いは不安や恐れをもたらすが、同時に「かくてありけり」が欠如しているゆえに「どっちにでも行ける」という可能性が秘められた「特異点」となる。

45

40

服の下に何かを隠しているだけなのだ。何か、大きなものを。

「ハディーヤ、やっぱり君は素晴らしい歌手になったね」

デークはゆつくりと近づきながら言った。

私は彼との再会をずっと待ち望んでいた。だが、こんな形ではない。「ずっと君のことばかり想っていた。君がどうしているかって、いつでも考えてた」

私は何かを言わなきゃいけなかった。でも言葉にならなかった。

「でもこれからはずっと一緒にいられる。ずっと一緒だ」

言葉は優しいが、覇気のない諦めきった口調だった。

「違う……、違う。もうモガディシュはそんな街じゃない。私たちはちゃんと幸せに生きていけるの。いろんな会社が警備の仕事を募集してるんだし、あなただって仕事を見つけれられる」

「もういいんだよ。そんなことは。なんの心配もいらないんだよ」

優しく明るかったデークの面影はそこにはなかった。真一文字に閉じられた彼の口元に深い絶望が見てとれた。

「もうアル・シャバブから抜けられるでしょ？ どこかに逃げようよ。昔、約束したみたいにな。誰も私たちを知らない場所に行こうよ。お願いだから、こんなことは止めて……」

私の頬は涙で濡れていた。

「もういいんだよ。怖がらなくて大丈夫」

彼は私の目の前まで来ると、私に強引なキスをした。

私は彼を止められなかった。

私たちは誰も彼を止められなかった。

私はもっと歌いたかった。

【対話文】

先生 最後の場面について、みなさんはどのように受け取りましたか。

生徒A 「待ち望んでいた」再会のはずですが、私はあまり明るい結末には感じられませんでした。

生徒B そういえば、彼は三年前から、アル・シャバブに拉致されていたよな。同じ国にいても、実際に戦争に参加させられていたかどうかでは、過ごす環境には違いがあるように思います。

生徒C ハディーヤは歌のコンテストに出たり、前を向いて生きている印象があつたけど、彼はそうではなさそうですね。ハディーヤが「勘違いしていた」とあるけれど、^アデークはこの厳しい世界で生きることを諦めようとしているように感じました。

生徒D 「もういいんだよ。」と繰り返し言うデークは、愛する故郷を捨ててでも、^イハディーヤと新しい場所で安全な生活を送ろうとしているのでしょうか。

生徒A 改めて最後の場面を読み返してみると、やはりあえてこの結末にした意味がありそうですね。美しい物語で終わらせるのではなく、悲しい結末を描くことによって、^ウ筆者は現実の厳しさを読者に伝えたかったのではないのでしょうか。

生徒B 一方でそうした戦争など、^エ理不尽な暴力に対して強く抗議する姿勢も示しているのだと私は思います。

先生 作品の結末の解釈を読者にゆだねる小説は多くあります。みなさんのように細かな表現に着目することで、さまざまなことに気づくことができますね。

問二 傍線部①「私が歌っている声が誰かに聞かれてしまったら、大変

なことになる」とありますが、なぜ大変なことになるのですか。本文中の語句を用いて二十五字以内で説明しなさい。

問三 傍線部②「母は妹を叩くのを止めた」とありますが、それはなぜ

ですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 娘たちの計画に危機感を覚え強く反対していた母だったが、ハディーヤの歌に対する情熱に心を動かされたから。

イ ハディーヤの危険な挑戦に強く反対していた母だったが、カフィーヤに痛いところを突かれ抗うことができなくなったから。

ウ 娘たちの考えに激しく反対していた母だったが、カフィーヤに生活の一助となる可能性をほめかされ、一家の明るい未来が予感されたから。

エ ハディーヤの浅はかな考えに反対の意を示していた母だったが、カフィーヤの反抗的な態度に圧倒されたから。

問四 傍線部③「事の重大さに気が付いた」とありますが、この時の「私」

の心情として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 期待 イ 絶望 ウ 緊張 エ 不安

問五 傍線部④「彼の曲は……輝いていた」とありますが、その曲を聴

くことによつて「私」はどのような影響を受けましたか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」はこれまで楽器を弾くことができなかったが、彼の素晴らしい演奏に心を打たれ、自分もギターの弾き語りを目標にするようになった。

イ 「私」はこれまでカドラ・ダーヘルトリコの歌が一番のお気に入りだったが、息をのむほどに素晴らしい彼の歌に感動し、彼の歌の虜トリコになった。

ウ 「私」は誰にも気づかれないように歌ってきたが、彼の勇敢な演奏に胸をうたれ、自分も危険を顧みず歌うことで優勝を目指そうと考えた。

エ 「私」は隠れて音楽を聴いてきたが、彼の勇氣ある行動から歌の力を再認識し、人々を勇氣づけられる歌を作ることを目指すようになった。

問六 次の文章は、ディークがアル・シャバブから戻ってきて、歌っ

ているハディーヤの前に姿を現す作品末尾の場面です。この場面について、先生と生徒たちによつて後のような対話が行われました。傍線部ア～エの発言のうち、解釈として適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

私は勘違いしていた。彼は決して太ってなどいない。

さるのか、と運営側には問い合わせが殺到したようだ。『スターズ・イン・ソマリア』は歌のコンテストだけではなく、起業を志す者が投資家に向けて自分が考えたアイデアを提案するシリーズもスタートした。

優勝はできなかったものの、周りの皆は私の歌を褒めてくれた。それだけでなく、知らない人からも声を掛けられることがあった。怖くなかったとは言えない。だが、街は少しずつ変わっていった。

モガディシウの街ではいつの間にか音楽が流れるようになった。単にアル・シャバブの支配力が弱まっただけかもしれない。それにタイミングを合わせるように『スターズ・イン・ソマリア』が始まった。もちろん、完全な平和が訪れたとは言い難い状況ではあるが、それでもモガディシウの街には音楽が戻っていた。

（須藤古都離「どうせ殺すなら、歌が終わってからにして」）

*作問の都合上、一部省略・改変した箇所があります。

※1 マイクロSDカード…動画や音楽などのデータを保存できる小型のメモリーカード。

※2 アル・シャバブ……ソマリアを中心に活動するイスラム過激組織。

※3 モガディシウ……ソマリアの首都。

※4 カドラ・ダーヘル……ソマリアで一番の歌手。ハディーヤのお気に入りである。

問一 二重傍線部 a 「皮肉った」、b 「不意に」、c 「体裁を取り繕った」

について、本文中の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 皮肉った

ア 大げさに悲しんだ

イ 手放しで賛美した

ウ 遠回しに非難した

エ 正面から批判した

b 不意に

ア 突然に

イ 無駄に

ウ 思い通りに

エ 無理やりに

c 体裁を取り繕った

ア 内容を修正した

イ 本来の形式を取り戻した

ウ 内容をごまかした

エ 表面上の形式を整えた

デイクがアル・シャバブに連れ去られる二ヵ月ほど前のある朝のこ

と。砂浜に私たち二人しかおらず、誰にも聞かれる心配がなかったの

で、^{※4}カドラ・ダーヘル⁴の歌を彼のために歌ったのだ。デイクしか

いなかったとはいえ、家族以外の人の前で歌ったのはあの時だけだ。

「ハディーヤ、いつか君は良い歌手になれるね」デイクは私の目を見

ながら、そう言ってくれた。私は彼の優しさに甘えたかった。彼の手に

触れたかった。だが、それもまた歌うこと同様に許されることではな

かった。

私たちは幼いながらも将来を誓い合っていた。デイクの氏族は別の

氏族とは結婚しないことが一般的なので、彼の両親が私たちの結婚に反

対することは目に見えていた。私たちはワンラ・ウエインの街に駆け落

ちしようと話していた。子供が出来てから戻れば、親も納得するだろう

と思っていたのだ。

もしかしたら、私の歌をデイクが聞いてくれるかもしれない。私は

ふとそう思った。全国のテレビやラジオで放送するのだ、デイクが聞

く可能性だって少なくないだろう。

そう思った瞬間に、突然私の曲が始まった。MCは咄嗟^{ととさ}の判断で審査

員との会話を止めて、もう一度私のことを紹介し、番組の^c体裁を取り

繕った。

私はデイクに聞かせるつもりで、あの時の砂浜を思い出して声を出

した。歌は私の喉^{のど}から自然に流れ出した。川が海に流れるように清らか

に、砂漠を歩くラクダのように確かに、私の歌はフロア中に響き渡った。

いつでも私を支えてくれたカドラ・ダーヘルの歌、私以外の誰にも聞か

れないように隠れて聴いた歌。その歌を、その感動を、他の人に分け与

えることができるのだ。これ以上に幸せなことがあるだろうか。

歌い終わると自然に涙が溢^{あふ}れた。五十人以上はいるだろう審査員も盛

大な拍手で、私の歌に反応してくれた。その瞬間に私は確信した。私た

ち、モガディシユの市民は暴力を恐れてはいたが、それでもみんな歌を

待ち続けていたのだ。みんな歌を、音楽を愛していて、誰にもその愛を

奪うことはできない。

番組はそのまま続いた。私の心には不安も緊張もなかった。どんな喜

びがこの先に待ち受けているのか、考えただけでわくわくしていた。

初老の男性は音楽家の血筋で、父親譲りの素晴らしい歌声を聞かせて

くれた。そして最後に歌った若い男性は、ギターの弾き語りで自作の曲

を歌い上げた。^④彼の曲はこの街で、この時代に作られた歌だとは思え

ないほどに輝いていた。私は隠れて音楽を聴くだけだった。しかし、彼

は自分の曲を書いていたのだ。それがどんなに危険で勇敢なことか、私

には痛いほど分かった。

今、私たちの街は変わるのだ。アル・シャバブはモガディシユから少

しずつ撤退していたが、それでも私たちの心は恐怖で支配されていた。

私たちはいつまでも恐れているままではいられない。私たちの歌が、モ

ガディシユの街を変えるのだ。

番組は自作の曲を披露した若い男性が優勝して終わった。私の心には

ひとかけらの不満もなかった。彼の歌は素晴らしく、私の次の目標にも

なったからだ。

私も、自分の歌を作りたい。この街で、変わりゆく人々を勇気づける

ような、そんな歌を作りたい。心の底からそう思った。

その後、『スターズ・イン・ソマリア』は予定通り全国のテレビやラ

ジオで放送された。モガディシユのみんなが番組を視聴して、放送日は

大変な騒動となった。次の放送がいつになるのか、どうしたら参加で

殺されてもおかしくないじゃない。それなら、私はせめて歌って死にたい」

「ハディーヤ、そんなこと言わないで。アル・シャバブだって、少しづつモガディシユから撤退を始めてる。今を耐え忍べば、もっと良い生活ができるはずよ」

「今を耐え忍べばっていつまで耐えればいいの！ 私がバナナを売って、いつまで二人を養えるの？ 今のお金が無くなったら、私にどうやって稼げって言うのよ？ ねえ、お母さん！」

「何といつても、ダメなものはダメ。お父さんが生きていたら、絶対に許さないでしょ」

「でも……」カフィーヤが口を開くと、母は幼い妹に手を上げた。

「でもない！ 私はあなたたちに生きていて欲しいの。それが分からないの！」母は泣きながらカフィーヤの頬を叩いた。

「でも……」カフィーヤも大粒の涙を流しながら言葉を続けた。「でも、優勝したら賞金がもらえるんだって……」

カフィーヤの顔は涙と鼻水で汚れていた。^②母は妹を叩くのを止めた。

(中略)

これは夢ではないのだ、本当に私たちが歌うコンテスト番組が作られるのだ。私はようやくここにきて、^③事の重大さに気が付いた。重要なのは誰がこの番組を企画したかではない。私の歌が全国で放送されるのだ。それはアル・シャバブの怒りを煽^{あお}って更なる暴力を生み出す可能性がある。だがもしかしたら、これがきっかけでモガディシユの街に音楽

が戻ってくるかもしれない。

主催者が私たち三人に番組の進行を伝えようとしていた。私は極度に緊張しており、彼女の言葉はひとつも耳に入らなかった。

もしもちゃんと歌えなかったら、どうしよう。私は今更そんなことを考えていた。今まで人前で歌ったことなど、殆^{ほとん}どない。予選会場ですら歌うことなく終わってしまったのだ、日常で声を出して歌う練習などできるはずがなかった。

私は呼吸を整えようとしたが、一般の審査員が続々とスタジオに入ってきて、周囲はざわめき始めた。気持ちを切り替えることもできずに、本番がスタートすることになった。

「テレビの前の皆さん、そしてラジオの前の皆さん、『スターズ・イン・ソマリア』ようこそ！ 今日モガディシユのスタジオからお送りいたします」燃えるような赤い生地のカジャブを着た女性が、カメラに向かって笑顔で話しかけた。

「今日集まってもらったのはモガディシユでもトップクラスの歌手三名です。彼らにはそれぞれ一曲ずつ歌ってもらい、審査員の皆さんの投票で勝者が決定します。まずは市場で働きながら家族を養う、元気な女の子、ハディーヤ！」

MCの紹介があり、小さくお辞儀をすると、すぐ目の前に座っている一般審査員たちが拍手をした。私は一瞬だけカメラの方を向いて、すぐに目を逸らした。眩い照明を浴びながら、私の曲が始まるのを待った。だが機材にトラブルがあるようで音楽は鳴らず、困り果てたMCの女性が番組の特別審査員たちを紹介し始めた。

私は^b不意にできた時間に心を落ち着けようと、昔の楽しかったことを思い出そうとした。

50

55

60

65

70

75

80

85

90

95



次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

① 私が歌っている声が誰かに聞かれてしまったら、大変なことになる。

もしかしたら殴られるかもしれない。殴られなくても、私の宝物である

※¹ マイクロSDカードは没収されてしまうだろう。 ※² アル・シャバブ

の勢力が残っている ※³ モガディシユでは音楽は禁止なのだ。音楽を流したラジオ局は襲撃され、人前で歌えば最悪の場合、殺される。

それでも、私は音楽なしでは生きていけない。こうして音楽を聴いているときだけが、幸せな時間なのだ。リズムとメロディ、歌だけが私に生きている意味を教えてくれる。私たちの生活から奪われてしまった何か素敵なものが、まだこの世界のどこかにあるのだと。

病気で寝ている母と、これから学校に行く妹のために朝食を用意すると、家を出て市場に向かった。

街では照りつける太陽が地面を焼き、吹きつける潮風が肌にまとわりつく。人々の話す声、走り抜ける車のエンジン音と騒々しいクラクシヨン、多くの家畜の鳴く声。そして内戦で廃墟となったビルを吹き抜ける風の寂しげな音。聞こえるのはそれだけだ。かつてこの街中で音楽が流れていたなんて、私には信じられない。今から十七年前、私が産まれた頃には、既にソマリアは内戦で荒廃していた。

私はバナナを売りながら、いつもの夢を思い返す。兵士に殴られることも、殺されることも悪夢に間違いない。だがそれと同時に人前で歌うことができるのも、ディークと会うことができるのも、夢の中だけなのだ。

ディークは三年前、私たちの前からいなくなってしまった。彼とはいつまでも一緒にいられると思っていた。だが、同時にいつか彼がいなく

なってしまうような気もしていた。

幸せな将来などないことは分かっていたが、まさかディークがアル・シャバブに拉致されるなんて思いもしなかった。

(中略)

夕方になって市場から家に帰ると、妹のカフィーヤが興奮気味に私の手を取って、その日学校で聞いた噂のことを話し始めた。

「ハディーヤ姉ちゃん！ 聞いて。今度ね、歌のコンテストがあるんだって。ナジャが言っていたの。ソマリアで一番の歌手を決めるんだって。お姉ちゃんなら一番になれるよ。だって、ハディーヤ姉ちゃんは誰よりも歌がうまいもん」

私が喜びの声を上げるよりも早く、「ダメよ！」という母の声が寝室から聞こえてきた。母はゆつくりと部屋から出て来ると、私たちを怒鳴りつけた。

「人前で歌うなんて、とんでもない！ あなた、サアド・ワルサメがどんな目にあったか忘れたの？ それに、シャイア・アウエルだって殺されたのよ。アル・シャバブに逆らって音楽を流したラジオ局だって放火されたの。誰かに歌を聞かせるなんて、殺してくれて言っているようなものじゃない！」

サアド・ワルサメは勇敢な女性だった。大統領が高級車に乗っているのに、外国の援助を求めていることを皮肉った曲を歌った。女性なのに髪を隠さずにステージに上り、男のようにズボンを穿いたりもした。アメリカで自由を学んだ彼女は議員になり、そして射殺された。

「でも、お母さん。それでも私は歌いたい。たとえ歌わなくても、いつ

2 0 2 5 年 度

第 1 回

入 学 試 験 問 題

国 語

試験時間 50分

注 意

- 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開いて見てはいけません。
- 問題は□から□まであり、全部で16ページです。足りないページや、印刷が不鮮明な箇所があった場合は、手をあげて監督者に申し出てください。
- 問題冊子と解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください。
- 解答は、すべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 問題の内容に関する質問は受け付けません。
- 試験終了後、監督者の指示に従い問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 特に指示の無いかぎり、句読点や記号は1字で数えます。

佼成学園女子高等学校

受験
番号